

編集委員が選んだ本

『原発と原爆 - 「核」の戦後精神史 -』

川村湊／河出ブックス／2011年8月／1300円（税別）

1945年8月の敗戦後の「焼け野原の国土と社会的混乱および人々の苦悩」の姿は、2011年3月の地震・津波災害と原発事故による「死の風景」と重なる。原発は、米ソ冷戦さなかの1953年以降、「原子力の平和利用」の名のアメリカの世界戦略に積極的にタイアップした日本政府と大企業が推進した「正しい国策」であった。異論反論は強くあったものの、多くの日本国民はしだいに原発推進政策を積極的にせよ、消極的にせよ受け入れていった。その慢心・過信は2011年に打ち砕かれた。しかし今なお、原発との共存を志向する勢力は相当強くある。原爆と「原子力の平和利用」（＝原発）。「唯一の被核攻撃国」日本の国民は、核に対してどのような受け止め方（捻れ）をしてきたのか。永井隆の「長崎の鐘」、ゴジラ、鉄腕アトム、ナウシカなどを紹介しつつ、日本の社会的文化的意識を分析している。

『日本史授業で使いたい教材資料』

埼玉県高等学校社会科教育研究会歴史部会編／清水書院／2012年1月／2800円（税別）

戦争体験世代が絶無に近づく時代を迎え、当時の体験や記憶をどう後世の世代に伝えるかが課題である。戦後史でさえ、その時々興奮や雰囲気を生徒に直接語る教員は少なくなってきた。歴史の授業では、「見てきた」ようなことをわかりやすく説明することが求められる。実物資料教材を工夫することで歴史の授業づくりに役立てようと、埼玉県の社会科高校教員たちが5年がかりでまとめた。全国各地での教材発掘のヒントにもなる。

『地図で読む戦争の時代』

今尾恵介／白水社／2011年4月／1800円（税別）

本書は戦前と戦後の地図を並べて比較することで、戦争の時代を見事に浮かび上がらせている。例えば、軍港があった横須賀の戦前の地図には等高線がなく、鉄道や道路のトンネルも描かれなかった。地形が分からないようにするためである。また、毒ガス工場があったことで有名な広島県の大久野島は、地図から抹消されており存在しない島であった。

出色なのは、台湾や朝鮮、「満州国」の地図も取り上げていることである。台湾を縦横に走る日本の精糖会社の鉄道路線、朝鮮の干拓地に記された日本の県名。これは日本からの移住農民が出身県別に集落を作ったことによる。日本の植民地支配の実態が地図にも刻まれているのである。

戦後、軍用地の多くが学校や公園などの公共施設に生まれ変わった。時代の転換を象徴する変化である。地図もまた歴史の資料として授業に活用できるということを示した好著である。

『沖縄と米軍基地』

前泊博盛／角川書店／2011年9月／724円（税別）

2004年8月、普天間基地に隣接する沖縄国際大学に米軍のヘリが墜落炎上した。その大学で教鞭をとる著者の主張は明確である。日米安保により国民の生命・財産が守られているはずであるが、沖縄では、その日米安保のために駐留している米軍が、国民の生命・財産を脅かす最大の脅威となっているという。

この矛盾を「国益」の名の下で正当化する論理が「米軍の抑止力」である。本書はその抑止力論のごまかしをさまざまな資料を駆使しながら明らかにしていく。

普天間基地移設に伴う海兵隊のグアム移転の理由は沖縄の負担軽減ではない。本当の理由は、北朝鮮の長距離ミサイルの開発や、中国の航続距離が延びた戦闘機の導入により、射程内に入った沖縄から射程外のグアムに移すことだと、防衛省幹部が発言している。在日米軍が何を守るためにあるのかを如実に示している。

『日米同盟の正体－迷走する安全保障』

孫崎亨／講談社現代新書／2009年3月／760円（税別）

日米関係が、日本の政治に大きく影響することを否定する人はいないだろう。

では、その日米関係が、最近、国民に知られないところで大幅に変わろうとしているとしたら・・・？

外務省の国際情報局長（重要！）をかつてつとめ、イランなどの駐在大使経験のある著者が、その内幕を語る。

「えっ？そんなことで決まっていたの？」「実際はそんなことだったの？」「それがアメリカ当局者の本音？」といった事実が、つぎつぎに明らかにされる。

しかも、著者の基本的なスタンスは、「日本も自主的にものを考えるべきだ。」「民主主義を大切にせねば。」という至極まっとうなものと感じられるのだが、その彼が、最近の外務省のなかでは、自身の立場を”異端”と位置付けているとしたら・・・？

『内部被曝の真実』

児玉龍彦／幻冬舎新書／2011年9月／720円（税別）

ネットで彼の名前を入力して検索すると、2011年7月27日の衆議院厚生労働委員会で、怒りをこめて国の無策を糾弾するYou Tubeの動画再生を見ることができる。

本書には、その際の彼の全発言から、「広島型原爆20個以上の放射性物質が撒き散らされた」ことの暴露だけでなく、毎週福島に除染に行き、肌身で感じたことから生まれた具体的な提言が載せられている。

さまざまな情報が入り乱れるなか、こうした発言こそが傾聴に値し、信頼し、行動の指針になるものではないかと感じられる。英科学雑誌『ネイチャー』の「今年の10人」に彼が選ばれたのも、うなずける。